明治大学情報コミュニケーション学部アカデミック・ライティング講座

第 4 回「論理的な文章はどのように書くのだろう？」：アカデミック・ライティングの学習

文責：内藤まりこ（情報コミュニケーション学部専任教員）

目次

1. （前回の課題）先行研究の書誌情報収集
2. 論理的な文章はどのように書くのだろう？
3. パラグラフ・ライティングとはどのような文章なのだろう？
4. 次回までの課題

1. （前回の課題）先行研究の書誌情報収集

1）図書の書誌情報の書き方

平野啓一郎『私とは何か―「個人」から「分人」へ』講談社、2012 年

〈著者名〉　〈図書名〉　〈出版社〉〈刊行年〉

2）雑誌論文の書誌情報の書き方

内藤まりこ「ヒトは鹿になれるのか―詩的言語と動物称（四人称）」『すばる』第 42 巻第 3 号 2020 年 3 月

〈著者名〉　〈論文名〉　〈雑誌名〉〈巻号〉〈刊行年〉

2. 論理的な文章はどのように書くのだろう？

1）「論理的な文章」とはどのような文章なのか？

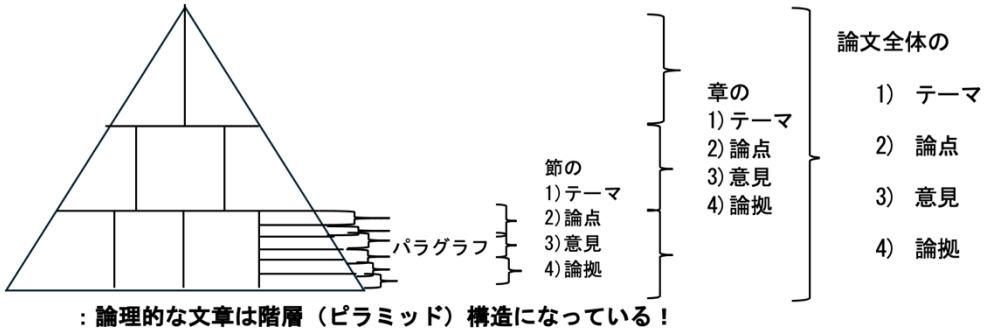
「論理的な文章」＝論述文

＝「自分の考えを筋道立てて説明する文章」（辞書的定義）

＝「自分の考えの妥当性を説得的な過程を経て論証した文章」

2）どのようにして自分の考えを論証するのか？

1. テーマ（主題）
2. 論点（問い・リサーチクエスチョン）
3. 考え（答え・主張・仮説・結論）
4. 論拠（事実・データ＋理由・分析結果）



：論理的な文章は階層（ピラミッド）構造になっている！

3. パラグラフ・ライティングとはどのような文章なのか？

1)「パラグラフ」と「段落」とはどう違う？

- 「パラグラフ」＝　文章の最小単位（これ以上切り分けられない文章のまとまり）
- 「段落」＝何となく同じテーマに関する文章のまとまり

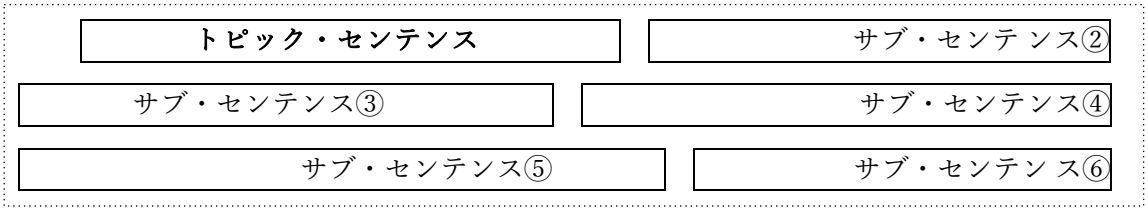
練習問題１：次の２つのパラグラフを比較し、良いパラグラフである方を選んで、理由を考えてみよう。

① 例えば、「個人」を表す日本語として、自分のことを称する「私」、話し相手のことを意味する「あなた」、他の人のことを指示する「彼/彼女/彼ら」等がある。また、言語学の観点からいうと、「1 人称」という文法学的な範疇に属する「私」という言葉は、「2 人称」の「あなた」や、「3 人称」の「彼/彼女/彼ら」とは、自分と他者を意味するという点において異なる。このように現代社会に生きる私たちは、「個人」という考え方が人間の最小単位であることを前提として、自分や他者のことを理解している。つまり、現代社会を生きる私たちにとって、自分のことを意味する「私」と、他者である「あなた」や「彼/彼女/彼ら」とが区別されるのは普遍的な真実であるように思えることなのだ。

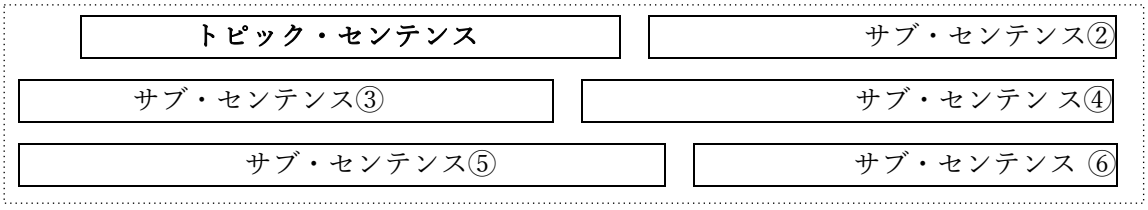
② 現代社会に生きる私たちは、「個人」という考え方が人間の最小単位であることを前提として、自分や他者のことを理解している。例えば、「個人」を表す日本語として、自分のことを称する「私」、話し相手のことを意味する「あなた」、他の人のことを指示する「彼/彼女/彼ら」等がある。また、言語学の観点からいうと、「1 人称」という文法学的な範疇に属する「私」という言葉は、「2 人称」の「あなた」や、「3 人称」の「彼/彼女/彼ら」とは、自分と他者を意味するという点において異なる。つまり、現代社会を生きる私たちにとって、自分のことを意味する「私」と、他者である「あなた」や「彼/彼女/彼ら」とが区別されるのは普遍的な真実であるように思えることなのだ。

■ パラグラフの構造

第１パラグラフ



第２パラグラフ



■ トピック・センテンスとサブ・センテンスの役割

「トピック・センテンス」＝1 つのパラグラフで言いたいことを、単文にまとめた文章。
「サブ・センテンス」＝①トピック・センテンスの内容についてのより詳しい説明や具体例
②トピック・センテンスの内容についての簡単な根拠づけ
③トピック・センテンスを別のいい方で言い換えたもの
④ 続くパラグラフとの繋がりをつける文

重要！トピック・センテンスはパラグラフの先頭に置くのがパラグラフ・ライティングの基本である。

2) よいパラグラフとはどのようなものか？

■ よいパラグラフの例

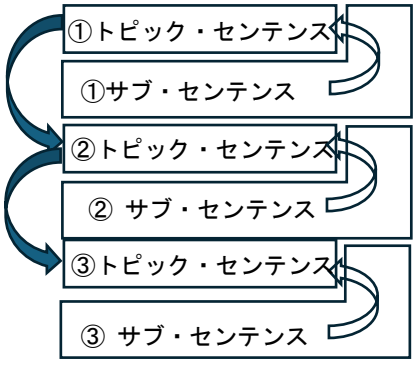
（トピック・センテンス）現代社会に生きる私たちは、「個人」という考え方が人間の最小単位であることを前提として、自分や他者のことを理解している。（**サブ・センテンス：トピック・センテンスの具体例**）例えば、「個人」を表す日本語として、自分のことを称する「私」、話し相手のことを意味する「あなた」、他の人のことを指示する「彼/彼女/彼ら」等がある。（**サブ・センテンス：トピック・センテンスの具体例**）また、言語学の観点からいうと、「1 人称」という文法学的な範疇に属する「私」という言葉は、「2 人称」の「あなた」や、「3 人称」の「彼/彼女/彼ら」とは、自分と他者を意味するという点において異なる。（**サブ・センテンス：トピック・センテンスの言い換え**）つまり、現代社会を生きる私たちにとって、自分のことを意味する「私」と、他者である「あなた」や「彼/彼女/彼ら」とが区別されるのは普遍的な真実であるように思えることなのだ。

（トピック・センテンス）ところが、歴史を紐解いてみると、「個人」という考え方や、「1 人称」、「2 人称」等の文法概念は、近代（日本の場合、19 世紀後半）になって西洋から導入されたことがわかる。（**サブ・センテンス：トピック・センテンスの言い換え**）つまり、これらは、普遍的な真実であるどころか、比較的最近になってから日本社会にもたらされた新しい考え方なのです。

（トピック・センテンス）しかし、こうした考え方は、近代以前に生み出された古典作品を解釈する日本文学研究の分野においても浸透している。（**サブ・センテンス：トピック・センテンスの根拠づけ**）なぜなら、文学研究自体が近代になってから成立した学問体系に基づいているからである。（**サブ・センテンス：続くパラグラフとの繋がり付け**）このことを検証するために、平安後期の貴族社会で中心的な役割を果たした歌人である源俊頼（1055-1129）を取り上げ、俊頼が詠んだ和歌が、従来の日本古典文学の研究者によってどのように論じられてきたのかをみていくことにしよう。

■ トピック・センテンスとサブ・センテンスの関係

1) トピック・センテンスは、前後のパラグラフのトピック・センテンスと論理的に結びついている。だから、トピック・センテンスを繋げて読むと、論文全体の主張が理解できるようにトピック・センテンスを作らなければならない。
2) 各パラグラフのサブ・センテンスは、同じパラグラフのトピック・センテンスのみと論理的繋がりをもつ。
3) パラグラフの冒頭にサブ・センテンスを配置し、パラグラフの中盤でトピック・センテンスを挿入してしまうと、読者は宙ぶらりん状態に置かれて、論理の流れを見失ってしまう。
4) したがって、トピック・センテンスはパラグラフの冒頭に置くのが基本である。



4. 次回までの課題

以下の練習問題に取り組もう。

1) 以下のセンテンスを並べかえ、１つのパラグラフにふさわしい文章に整えましょう。

a. 1920 年には明治法律学校は大学令によって明治大学となった。
b. そうした経緯を経て、2001 年には創立 120 周年の式典を催した。
c. 1881 年に岸本辰雄･宮城浩蔵・矢代操によって明治法律学校が創立された。
d. 第二次世界大戦後、1949 年には新制明治大学として認可され、法・商・政経・文・工・農の６学部を擁する大学として新たな出発をした。
e. この時点で、長年にわたる学部制度や施設を拡充の動きは一つの節目を迎えた。
f. 1950 年以降、生田キャンパスの開設や、大学院の拡充、経営学部の開設、さらには新校舎の建設が進められた。
g. 1960 年代の頃から学内の質的な改革が叫ばれるようになった。例えば学費問題や全共闘運動等々である。
h. 明治大学は開校以来、学部制度や施設を拡充し続ける一方で、質的な改革が行われることで新たな時代を担う大学へと変化してきた。
i. このように、明治大学は、制度や施設の規模拡大のみならず、教育研究の質の向上を追求する姿勢を強めてきている。

2) 以下のセンテンスを並べかえ、１つのパラグラフにふさわしい文章に整えましょう。

（ア） また、ウィレムと同時期に生きたオランダ出身の画家であるピート・モンドリアンも同様の例としてあげられる。
（イ） 1910 年代のヨーロッパにおいて知識人は、西洋近代への批判的視線だけでなく東洋への憧憬の視線をも有していた。
（ウ） シュタイナーは第一次世界大戦後のドイツの破滅的な状況から西洋の近代化の諸問題を読み取り、近代化の過程で軽視されてきた人間存在に備わる精神性が東洋では重視されていると論じた。

（エ） このように、当時のヨーロッパでは、西洋を近代化による諸問題を抱えた地域として批判的に認識し、翻って東洋を近代化で西洋が失った精神性が保持されている地域として神秘的に捉える思想が培われていた。

（オ） モンドリアンは縦と横の線で構成された絵を描いたが、それは単なるキュビズムの模倣ではなく、彼が 20 代後半から関心を抱いていた神智学の影響を受けたものだった。

（カ） オーストリアやドイツで活躍した哲学者のルドルフ・シュタイナーは、人智学（神智学）と呼ばれる精神運動を創唱したことで知られる。

3) 以下のパラグラフのサブ・センテンスを読み、トピック・センテンスを作りましょう。

「　　（トピック・センテンス）　　」「文人」像の歴史を辿ると、「文人」という言葉の初出は中国最古の詩篇『詩経』や中国古代の史書『書経』にまで遡れる。そこでの用例は「文徳の備わった先祖」を示しているので、ここでの「文人」の意味とは直接には結びつかない。それから唐以前までは詩文の才能に秀でた人物のことが「文人」と称される傾向にあった。宋代になると、「文人」は、必ずといってよいほど詩文のみならず、書画音楽などの芸術と関わる人物を意味するようになった。それ以降も時代を通して「文人」は中国社会で重要な人間の類型として捉えられ、それぞれの時代において「文人」のあるべき姿が議論されてきた。「文人」に類似するものとして「読書人」や「士大夫」があるが、「読書人」は古典の素養と詩作文の能力のみが重視され、「士大夫」が古典の素養と詩作文の能力に加えて、「治国平天下」の使命感を抱き、その実践の形では官僚として活動することが必要条件とされる。これに対して、「文人」は古典の素養と詩作文の能力だけではなく、書画音楽などの芸術に秀でることが重要であるとされた。このように、中国の歴史を通して「文人」は伝統的な人間の一分類として独自の意味を持ち続けてきた。